

地理斗アピール

1953.5.30

愛知外相訪米阻止! ASPAC 粉碎に向けて東なる斗争の深化を!
全共斗の再編強化へ総ての斗う学友諸君は結集せよ!

メーデーに始まった五月斗争はより強固な権力の弾圧の中で 発展とげ六月斗争へ入ろうとして居る。まさしくそれは 5・20 の林動隊の学内暴入 5・24 の大学追害少女の国会暴入といった一連の事態が如実に示している。しかしこのまさに帝國主義的弾圧の中に於て我々は愛知訪米阻止 ASPAC 粉碎 そして 11 月在外訪米阻止 70 年安保紛争を一つの踏み台とした 70 年代階級斗争 へ向けに隊列をより強固にし大衆的なバックアップを積まじり、日帝打倒へ向けで突き進んでおろうこととまがはつきりと明らかにした。

そして我々がその斗いに立命に於て押し進めようとする時、あの黄ハルの反革命暴力カネ子であるところの日本=民権をまさしく斗争破壊者として我々の前に登場するのである。そして彼らの行動は 皇土日共体制による一元的学内支配を徹底して 学内自治性をもって、権力・当局から免罪されているのである。このようなまさしく對立的支配の体制の中で、大学女あるいは学向が存在しているはずはないのであり、そこにはまさしく日本の類型としての大学の姿を見ざるさえない。総ての学友諸君のように内面的に破壊した大学の存続を許してはならないのだらうか。我々はまさしくこの明白なる見地を去る 20 日わだつみ像をひき倒し、その存続を保っているところの大学施設をうちこわし、外面的破壊を行ひ、東夷的東大解体を押し進めたのである。しかしながら我々は理論的にこれらの破壊行為を正当化しようとしているのでは決してない。真の主題はどのような大学を存続させることとそのような大学を解体させることとどちらが自己に対して、また全人民に対して犯罪的であるかという点にある。学生が自らの存在基盤であるところの大学を解体しようというのはいかなる意味をもっているのであらうか。それはまさしく現代日本の社会に於ては個人の存在というものがまったく無視され、人間は 1 個の歯車として 1 個のねじくぎとしてしか作用されてはならないと、容観的な事実認識があるからであり、そして、その 1 個の歯車 1 個のねじくぎから人間に復帰しようとする時、権力側はそれらを徹底的に抹殺し、疎外してくるのである。そこには一切の自由も一切の平等も存在する余地はなく、現存権力側から言われている自由と公平はまさしく小作工によるギマンでしかありえないのだ。

そこに於て諸君が 11 月に自己をごまかそうとも、いかに自己をワイドしようとも、たとえそれが自己満足を得られようとも、決して自分を生きていることが実感としてとらえられなければならない。それは明らかに他人に対しての敵対であるという事象からは逃げられなければならないのだ。大学とはまさにこのような人間の大衆生産工場であり、権力・当局はその工場の支配者として又現場カントウとして存在し、絶えず我々を監視し、少しでもその工場の主旨に合わぬ行動をする、あらゆるものでもうて圧迫し、抹殺してくるのである。それ故に我々としては大学解体を高くに叫ばなければならぬ。圧倒的な大衆と共にそれを實現し、進めなければならぬのだ。総ての学友諸君が全共斗の旗のもとに結集し、我々とともに大学解体へ、そして日帝打倒へ向けで前進しようではないか!

総ての文学部の学友は 明日(31日) 1 時 京大教養部に於ける学斗争との討論集会に参加し、徹底的に自己構築を行なおうではないか

立命全共斗文学部地理斗争委員会